

城下より二里南なる高山村正樂寺の住職なるが、戦争のため往來止めにも身も世もあらぬ思ひして與板の西本願寺掛所にありしが、少しく警戒怠るを見て母の身如何にと探し當て來まし、時ぞ、再生の心地してくる。坊主の俄小僧に身をやつし引取られし時の嬉しさ、忘れてならじと奥さまくらべの續きくらべ、奥様と呼はるるに似もやらぬ夫人もあるに、いろはも知らでかかと呼はるる山姥にもかかる頼母しきがあるを見れば人の性は教えにも習にもよらぬものにやと感じさ。

夏の蝶あはれや軒にあま宿り

印度土人の家庭生活 (承前)

Y.

I.

印度人は、一般に親切で快活な方ですから、そ

の家庭の生活にも、やはり此氣質が反射して居ます。

夫から、結婚のことに付て、一言申し上て見ましようか、此國の兒童の結婚法は、まことにわるい風習なので、之からしていろゝの弊害が起るのでございます。まかし、印度人は割合に親切な感心すべき方法で以てこの悪い制度を實行して居ます。素より年も行かない幼ない女兒が、今まで知らない良人の家族に渡されるのでございすから、時々は悲しい愛い目に遭ふことのあるのは、疑ひもないことではありすすが、もとゝ此女兒たちの自宅に居ります時分には、其母親達か今に姑の許にやれば、直に矯正せられるであらうといふので、大變に氣儘に育てまするのは、寧ろ憐むべきことではございす。

これに付ても思ひ出すのは英國の少年男子のことですが、家庭において居ます頃は、どうも手に餘るほど生意氣で亂暴で困りますと、皆が、今に學校に入れてしまへば、直になるると云つて辛抱して居ますが、眞實にそうなのです。學校にはいつて初めのうちは、面白くないでしやうけれど、丁度印度の少女等とおなじことで、まもなく守らなければならぬ規律にも馴れ、自分達の分限をも知るやうになります。公立學校で少年男子が、上級の年長者にいちめられるとか、ひどいめにあはされるとか云ふ話を、いくら聞くか知れませんが、多分ほんとうなのでしやう。これは疑ひもなく學校組織がその弱點と不完全なる方面とを示して居るのでございます、けれども苦しめられる者の方から見れば、多くの人々はこの嚴酷な訓練

を受けた爲めに、大に益せられて、以前よりも餘程善い人となります。之とおなじことで、印度の少女等は家政ひきの一切の仕事やその流儀や毎日の暮のよしなしごとにしたるまでも、怖しい姑のきびしい監督の下で教へこまれて始めて有爲の婦人となるので、いまに又順が来れば、自分で一家を整理し他の少女を訓練することを希望するものが當然なのでございます。恰も上級のものに使役せられて、苦しい生活をなす公立學校の少年男兒が何時かは、上級に登つて愉快にくらす順番の來るのを希望するのと少しも變りはございません。

印度では、凡ての男子も女子も結婚しなければならぬことになつて居まして、年わかい妻君は徹頭徹尾姑と長上とに服従しなければなりません。ですけれども、自分では何の撰擇もできない

ほど幼少のときに、結婚して他家に遣られること
 ですから、割合に辛抱がいたしよいのでございま
 す。それですから、英國風の男女の自由結婚を賞
 賛する妄説は、いつも打ち消されるのでございま
 す。これと申しますものも、全體印度の社會組織
 では、自由とか撰擇とかいふことは、男子にござ
 へも僅がしか許されて居ない位ですから、まして
 女子のためには秋毫も是認されて居ないのでござ
 います。

印度の男子に自由の權を許すべきことに付いて
 は餘程人々がやかましく云ひ出しましたにも係ら
 ず、女子は依然として何時までも束縛されて居ま
 す。

男子方であつて見れば、自分が願へばいくどで
 も結婚することが出來ますのに、僅か十歳か十二

歳の少女が今日結婚したすぐ翌日であらうとも、
 萬一その良人に死別するやうなことがありませ
 と、もう一生涯寡婦で暮さなければならぬので
 ございます。

前に述べましたやうな風俗であるにも係はら
 ず、印度人の結婚は他國人の考へるよりも、案外
 に幸福になるのではございませうが、併しもうい
 加減な中年の男子が、申さば振分髪の時分から連
 れ添うて、二十年あるひは三十年といふ永い間苦
 樂をともしにくらした妻を失なうて、其悲しみの袖
 の尙干るまもない數日の間に、自分の祖母やある
 ひは年老いたる伯母の心を満足させるためとか、
 又は自分の快樂のために、規定の年齢を過ぎて居
 ない一少女兒を妻に娶らうとして、探すといふも
 のは、むしろ此の上もなき悲觀でございます。(續)

夏山に戀しき人や入りにけん

聲ふりたてゝなくほとゝぎす

子どもの泣くことについて

ひさ子

私がこゝに申さう、と思ひます子どもは、一歳や、二歳の赤兒ではなくて、おもに幼稚園時代の、四歳から八歳位までの子どものこととさせていただきます。

一體、子どもはよく泣くものでございますが、これには、肉體の苦痛の方から来る啼泣、たとへば、頭が痛いとか、腹が痛いとかに、堪へられませんで泣くのと、また精神の方から泣くのと、大別して二種類になるであらう、と思ひます、そう

して私は今、精神の方に付て考へたことを申し上げます。

子どもが、精神の方から泣きますには、誠にいろいろございまして、一々かぞへることはできませんが、まづすねて怒て泣くのもあり、悲がつて泣くのもあり、物事にびつくりして泣くのもあり、こはがつて泣くのもあり、氣が小さく依頼心がつよくて、極小さな何でもないことに泣く子もあり、又自分の慾望をかなへんために、泣いておどすのもあり、又自分の悪かつたことをはぢて泣くのもあります。又大きな聲で、永く泣くのもあれば、しくしくと泣くのもあり、大聲で泣いてすぐやむのもございます。

此通り、子どもの泣くのに、實にいろいろございしますが、此泣くといふことゝ、子どもの性質